音読テキスト「日本の名文」14

青空文庫を元としています
参考　：ウィキペディア

押絵と旅する男

江戸川乱歩

いつとも知れぬ、ある暖かい薄曇った日のことである。その時、私は態々魚津へ蜃気楼を見に出掛けた帰り途であった。私がこの話をすると、時々、お前は魚津なんか行ったことはないじゃないかと、親しい友達に突っ込まれることがある。そう云われて見ると、私は何時の何日に魚津へ行ったのだと、ハッキリ証拠を示すことが出来ぬ。それではやっぱり夢であったのか。だが私は嘗て、あのように濃厚な色彩を持った夢を見たことがない。

夢の中の景色は、映画と同じに、全く色彩を伴わぬものであるのに、あの折の汽車の中の景色だけは、それもあの毒々しい押絵の画面が中心になって、紫と臙脂の勝った色彩で、まるで蛇の眼の瞳孔の様に、生々しく私の記憶に焼きついている。着色映画の夢というものがあるのであろうか。

私はその時、生れて初めて蜃気楼というものを見た。蛤の息の中に美しい龍宮城の浮んでいる、あの古風な絵を想像していた私は、本物の蜃気楼を見て、膏汗のにじむ様な、恐怖に近い驚きに撃たれた。

魚津の浜の松並木に豆粒の様な人間がウジャウジャと集まって、息を殺して、眼界一杯の大空と海面とを眺めていた。

…(中略)…

日本海は荒海と思い込んでいた私には、それもひどく意外であった。その海は、灰色で、全く小波一つなく、無限の彼方にまで打続く沼かと思われた。そして、太平洋の海の様に、水平線はなくて、海と空とは、同じ灰色に溶け合い、厚さの知れぬ靄に覆いつくされた感じであった。空だとばかり思っていた、上部の靄の中を、案外にもそこが海面であって、フワフワと幽霊の様な、大きな白帆が滑って行ったりした。

「押絵と旅する男」

魚津(富山県・蜃気楼で有名)に蜃気楼を見に行った「私」は、列車の中で、一人の高齢の男に出会う。彼が持つ押絵(布で作った貼り絵)には、八百屋お七とそれに寄り添う白髪の老人の姿が精巧に作られていた。そして、男は、持っていた押絵に関わる因縁話を始める。

昔、呉服屋の長男であった兄は、引きこもりのような生活をし、女性に興味を示さなかった。ところが最近どこかへ通い詰めてるようだ。もしやと思って、後をつけてみると、高い塔(関東大震災で崩れた『陵雲閣』)の上から望遠鏡で何やら覗き込んでいるではないか。兄に問いただすと、そこから見える一人の女性が好きになったという。二人してその女性を探し出すと、なんと、それは人間ではなく、見世物小屋に飾られた、八百屋お七をかたどった押絵の少女であった。しかし、それを知っても、兄はあきらめきれず、その少女と一緒になりたいと言い出す。そして、異人の伝えた望遠鏡を逆さにして見ると、絵の中に入ることができると言うのだ。はたして、望遠鏡を逆さに覗き込むと、兄は自らも押絵に変貌して、絵の中に入り込み、少女と夫婦になることができたのだった。ところが、長い年月が経つにつれ、少女の方は年も取らず若いままだが、もともと人間であった兄の方は、すっかり老いさらばえ、白髪となってしまった。

男は、兄夫婦(?)に、ぜひとも新婚旅行をさせたいと、こうして押絵を持って汽車の旅を続けているのだというのである。男の後ろ姿が、押絵の中の老人そっくりであることに、「私」が気づいたところで、物語は終わる。

引用は、作品の導入部分だが、これだけでも異様な雰囲気がよく伝わってくる。

読者の中には、子どもの頃、乱歩の「怪人二十面相」シリーズや少年探偵団シリーズに心躍らせた方も多いのではないかと思う。現在でも映画化されることがある。古い言葉もあるが文章自体は古びることなく、いまもわかりやすさの中にも妖しい美を湛えた名文の魅力は健在である。乱歩の生没年は、明治二十七年～昭和四十年、本名平井太郎。